

【生物】

関西医大の入試生物は選択式・記述式どちらも出題されるが、伝統的には、生物用語間の関係性を四角い箱と矢印で表現したタイプの問題が有名である。

内容レベル的に特に高いというわけではなく、またリード文も短め、訊き方もシンプルで、近年の他大医学部に見られるような意図の分かりにくさなどはない。よって少々細かな知識を問う選択問題でどれだけ得点できるかが重要となるのだが、あいにく出題分野的にも特別の傾向やこだわりは見られない。

昨年度はホルモン、浸透圧、光合成色素、組織、発酵だった。過去3年分をみても、現代入試生物の定番である遺伝子工学（遺伝子組換えなど）・発生工学（ES, iPS細胞など）は、生態系・進化・分類などと同様に皆無となっている。

そこで今年度は、聴覚器や筋収縮のしくみ、循環や肝臓の働き、尿生成など、特にヒトや動物の体関係を重点的にチェックしていくとよい。また遺伝子分野としては、DNA計算や転写翻訳のしくみ程度は頻出であり、さらに植物分野では被子植物の重複受精、生活環が→記号で表現されやすいので、これらも要注意分野となる。どんなに忙しくても、せめて一度は見直してから本番に臨むこと。健闘を祈っています。

【化学】

新課程となった今年度であるが、関西医大においては無機1問、理論2問、有機1問の構成となるのではないかと思われる。ただし、理論の問題を解くに当たり、無機の正確な知識は必要となる。

遷移元素の反応（特にクロム、マンガン、銅）また典型元素であるが、スズ、鉛の性質は要注意である。理論では盲点となりそうな分野である浸透圧、溶解度（溶解度積を含む）、中和滴定（特に沈殿を生じるもの、2段階中和等）を見直しておこう。有機は芳香族化合物の構造決定、分離が狙われそうに思われる。また、理論とは重なるが油脂、セッケン、コロイド溶液も見直しておこう。